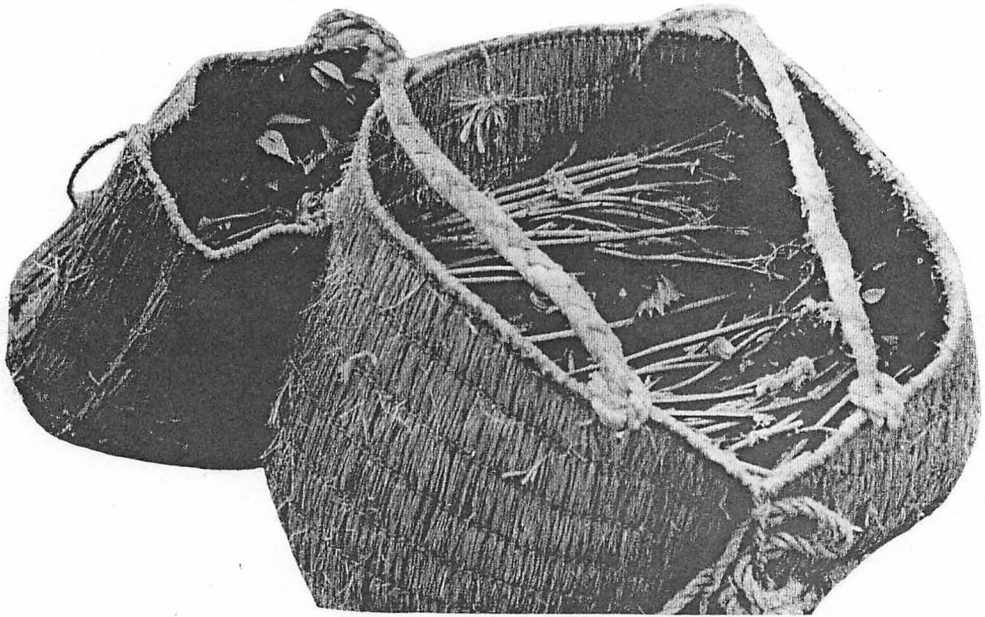


# はくさん



「ネキガイ」と「ドウラン」

雪がとけはじめると、山の斜面はいろいろな植物の芽ぶきの季節をむかえます。この季節は植物だけでなく、やわらかくてかおりの良い山菜を求めて動物もヒトも活動を開始します。

写真は、そうした早春の山菜採り—山菜には野の草のように摘むという表現はあたらないでしょ—に使われるワラ製の民具です。このうち大きい方は、吉野谷村中宮で「ネキガイ」とよんでいるもので、白峰村ではこれを「ドウラン」といっています。このなかには、ミヤマイラクサ（白山麓ではイラとよんでいます）やゼンマイなどがみえています。

小さい方は中宮で「ドウラン」とよび、白峰で「ツケドウラン」とよぶワラ製の民具です。これは腰にくくりつけ、採集した山菜をいったんここに入れ、一杯になると「ネキガイ」にあけるわけです。写真ではこのなかにモミジガサ（キノコとよんでいます）が入れてあります。

もちろん、「ネキガイ」も「ドウラン」も山菜採りにだけ使われるわけではありません。いろいろな農作業や秋の木の实拾いなどにもこれらが使われています。

〈松山利夫〉

13頭の子供が生まれた。

蛇谷のニホンザル カムリA群



解説

長い冬を耐えぬいてきたニホンザルに、豊かな春が訪れた。今年はカムリA群62頭が越冬した。



この春、4月3日から5月26日にかけて13頭の子供が生まれた。



子供が一頭死亡した。母親は死体を8日間抱いて歩いていた。



春、山の斜面にある草原に芽をふくアザミはサルの大切な食料だ。



5月、地元吉野谷村の主催による野猿公園開行なわれ、サルの生命力に感銘していた。

# 熊の褥(しとね)

松尾秀邦

"ツキノワグマ"の器用さについては、昔からいろいろな話があるようであるが、"しとね(褥)"なるものまで製作するとは思わなかった。

話は少し古くなるが、昭和24年11月上旬、今は廃村になっている福井県九頭竜川上流の久沢(くざわ)という、当時でも数軒のみの"平家部落"の一つといわれていた付近を地質調査していた時の事である。

部落の古老に銅を掘った跡があるから見に行かないかとの御誘いをうけて、一日部落を後にした。霧のふかい朝で、せまい山路を辿ると露でびしょぬれになる。処々に、マタビの実が真赤に熟れている。熊に食べられる前に頂戴しましょうというわけで、口に入れると冷めたい漿液(ジュース)が甘い。

ひとしきり登ると、山道に隠れるようにして僅かな田圃が見えた。この谷筋では日当たりが悪いのにとあって良く見ると、田圃の隅に一叢の大麻が認められた。"隠し田"である。爺さんは黙って、小径を下り、田圃の切り株を踏み越えて行く。更に径なき山径らしきものを登ると、やがてブナの大木がまばらに残っている日当りのよい大きな斜面に出た。

「そのブナの木の前を左を通って、その谷筋に入れば、奥に掘った跡がある」という。"そのブナの木"に近付くと一抱え以上の大木で、木肌に無数の掻き傷が認められる。囲りには、その木のものと思われるブナの小枝が散乱している。

ふと見ると、ブナの木の前根元の処に円坐の

ように見える直径50~60cm位のブナの小枝の塊りがある。小枝をまるく囲って、細枝を旨い具合に折込んである。

"熊のしとね(褥)"だと爺さんはいう。流石である。平家落武者の子孫だけあって、坐蒲団なる語を用いない。本当であろうか、吾々でも旨く作れるかどうかわからぬ位の出来映えで、熊が作ったものとは思えぬ手際の良さである。

それを杖の先で起こしながら爺さんはいった。「先刻までいた」。木肌の傷が急に生々しく見えて来た。吾々二人の気配を察して、遁走したとおっしゃるが、まだその辺りにひそんで、こちら次第ではスーッと姿を現わしそうな気がする。

そのものの囲りには、ブナの殻斗が無数に折れた小枝と一緒に散乱している。爪で上手にほじくり出して食べるのだそうである。冬眠が近付くと、食事は水気のない乾果を食べるようになるという。成程、理屈に合っているし、ヤマブドウ、マタビが残っていた理由もわかった。それにしても、ブナの種子の大きさでは、歯の間にはさまって大変だろうといらぬ同情も湧いてくる。とにかく、手製の木蒲団の上にどっかと坐り込んで、ブナの殻斗を爪でつまつまとはじくり食べている熊の姿は逢いぐるみ人形のサマになると微笑しなくなった。

爺さんの話によると、冬眠前の"最後の食事"はマツの"アマカワ"だそうである。見渡した処マツはないので、冬眠直前とはわか

らない。この辺りの高度であるとマツはゴヨウマツで球果も大きく、種子もブナのそれに較べるとはるかに大きいので、熊の餌としては当然ゴヨウマツの実の方を望んだであろうが、生憎とブナ林にはマツはないので、此处ではブナの種子を食べるはめになったのであろう。冬眠前の一仕事にしては、時間のかかる大変な事である。

その後、白山、平家岳、大日岳等に入り込む谷では熊の足跡は見えても“熊の褥”には御目に掛っていない。

あれは、日当りのよい処の大木を背にして、昼日中、その木の実をほじって食べる為の円

坐そのものであろうし、夜は仮寝の高いびきという処であらう。小枝の褥とは洒落たことをする。

ひよっとすると、この製作者は小生のような“痔主”であらうかと同情もした。直かに地面に腰を下すのは冷えて具合が悪くなるので、坐蒲団ならざる木蒲団を作らざるを得なかったのか。もっとも、四足で歩く“けもの”には痔疾はないとの事で、この同情はいらぬものであった。

それにしても、“ツキノワグマ”の器用な一面を充分見せて呉れた事には間違いない。

(金沢大学教養部)



(イラスト 金沢市大川憲治)

## 6 月 の 花

梅雨前の蛇谷はめっきり花が少なくなる。

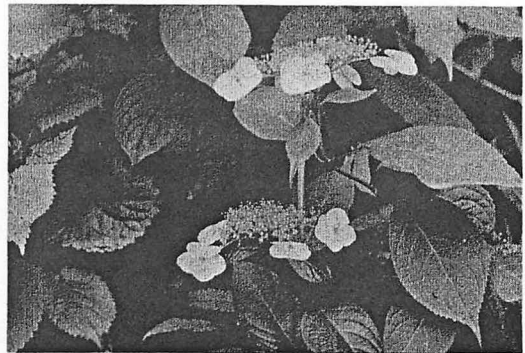
今まで咲いていたタニウツギ、ヒメウツギ、ヤブデマリやムラサキサギゴケなどの花も終わった。

今年はどういう訳か雨が少なく、民家の庭先に植えられたアジサイの花も心なしか色があせて見える。例年今ごろは我家の庭に咲くネジバナの花もまだ咲かないし、6月の蛇谷をスカイブルーに色どるエゾアジサイや、金沢大学の里見先生が「夢のような花」と評したコアジサイの花もまだその気配がない。

長い雨もいやなものだけど、こうなると、いつもの梅雨の長雨が懐かしくなる。

〈研究普及課〉

四手井 英 一



エゾアジサイ

## 白山の民話 (1)

# オロチ 泰澄大師と大蛇

石野春夫

むかし、むかしのむかし、白山のお山の上には沢山のオロチが大蛇が住んでいました。その数は三千匹だと言われていました。この大蛇が山麓の村へ出て来ては畠を荒したり、ニワトリや犬を取って行ったり、人にも害を与えたりして悪いことばかりするので、人々は大へん困っておりました。

泰澄大師が白山にお登りになったとき、村人達の困っていることをお聞きになり、三千匹の大蛇達を集めて人間に迷惑をかけてはならないことをおさとしになりました。

しかし、どうしても言うことを聞かない大蛇が一千匹おりましたので、これを斬り殺して一ヶ所に埋めてしまいました。これが弥陀ヶ原近くの旧道脇にある蛇塚であると言われていています。

残った二千匹のうち、一千匹に巾ヶ平の刈込池（福井県大野市五箇町小池の山の中）に住むように言いつけられました。あとの一千匹は白山頂上に近い池の一つに住むように言いつけられました。

大蛇達は偉いお坊様の大師様の言うことを聞いて二つの池へ移り住むことになりました。

大蛇達が全部移り住んだことを見とどけら

れて大師は刈込池の近くの三ノ峰附近の大岩の上に大剣を立てられて、その影が池の水に映るようにされました。大蛇はクロガネ（鉄）が体にふれると体が腐ると言われているので水面に映る大剣の影に恐れをなして池から出て来なくなったと言われていました。この剣を立てた大岩が剣塚と呼ばれております。

一方、白山頂上近くの池に移り住んだ千匹の大蛇は、そのまゝにしておくと悪さをすることも知れないので大師は雪のふたをされて、この雪のふたが融けてしまうまでは池から出てはならないとお言いつけになりました。

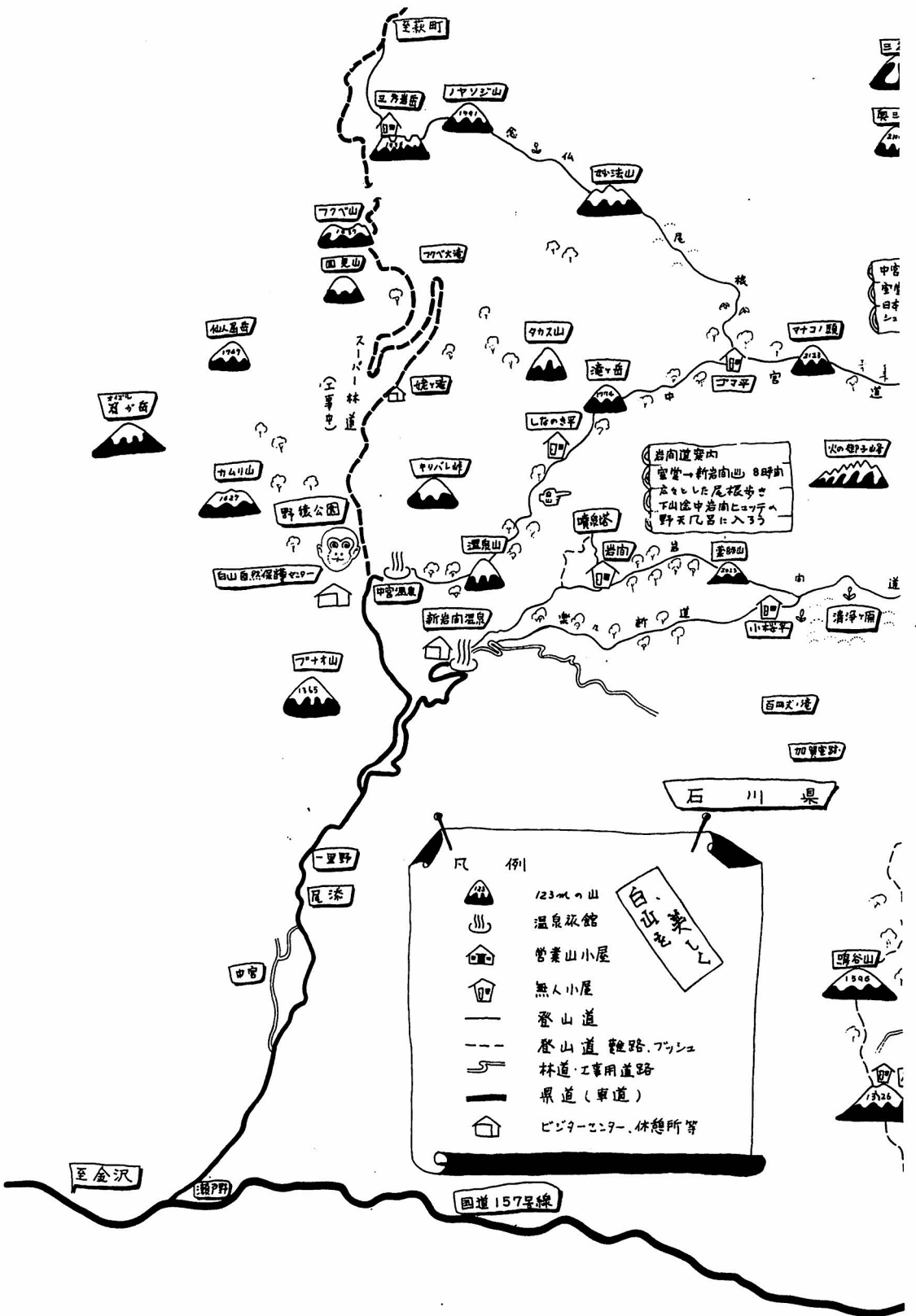
更に永い年月の間には雪のふたが融けることもあるかと心配されて、大師は池の上にあるお宝蔵がくずれ落るようになされたということです。

今でも、この千匹の大蛇の住んでいる池は夏の土用でも融けることのない雪の下にあって大蛇達は雪の融けるのを待っているそうです。

この池は千蛇ヶ池と言って白山の名所の一つになっていて毎年沢山の登山客がおとづれますが誰一人として雪のふたの下の大蛇を見た人はいないそうです。 〈鶴来町〉



(イラスト 石川太郎)

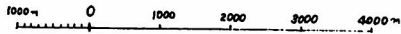


# 白山国立公園



山道

白山7km

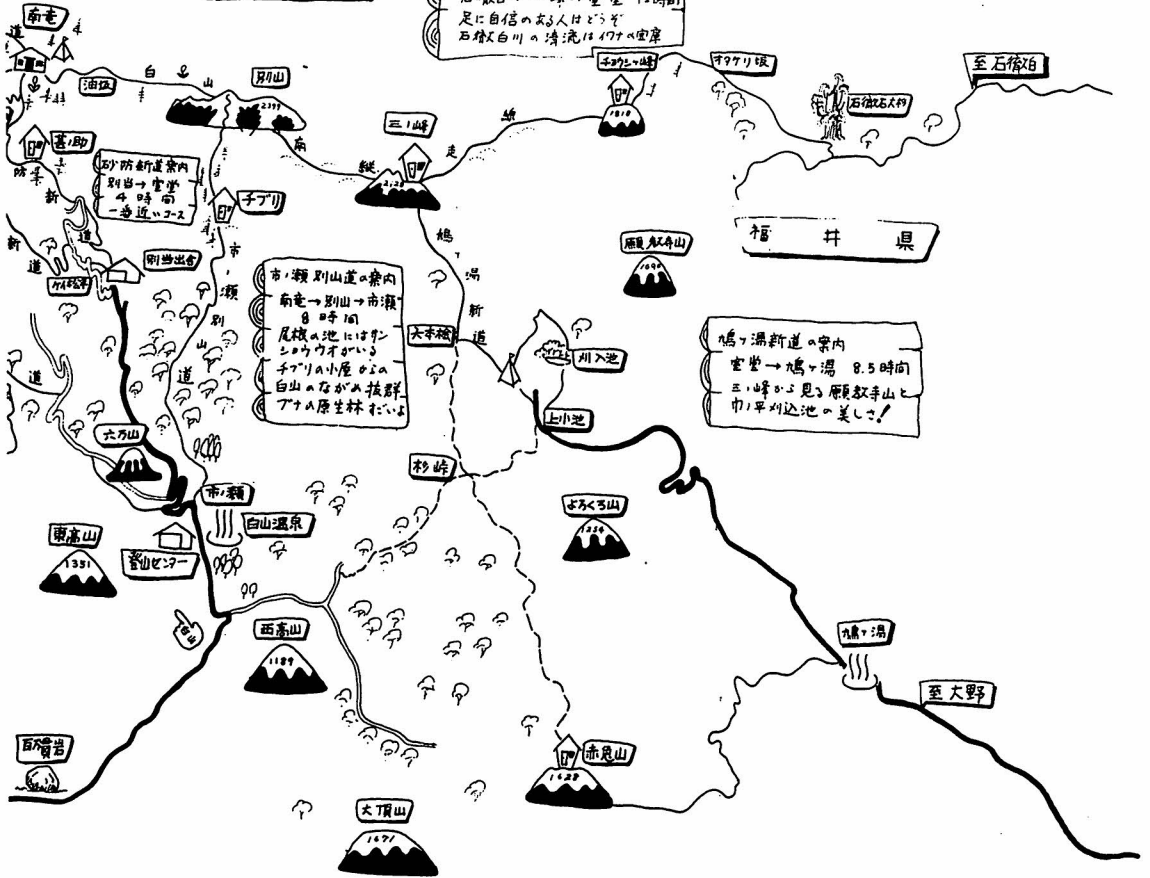


平瀬道案内  
 大川川 → 室堂 4時間  
 室堂 → 大川川 2.5時間  
 氷り場い尾根コース



岐阜県

白山南縦走線 (石楳白道) 案内  
 室堂 → 三ノ峰 → 石楳白 10時間  
 石楳白 → 三ノ峰 → 室堂 12時間  
 足に自信のある人ほど  
 石楳白川の清流は17℃の涼



市・瀬別山道案内  
 南岳 → 別山 → 市瀬  
 約4時間  
 尾根の池に10分  
 シロクワが咲く  
 子ノ川小屋の  
 白山の石が根群  
 アノ原生林

鳩ヶ湯新道案内  
 室堂 → 鳩ヶ湯 8.5時間  
 三ノ峰から見る雁尾山と  
 川入池の美しさ!

福井県

## 〈白山麓白峰〉 聞き書き(2)

# 白山熊

話者 加藤 勇京

筆者 織田日出夫

このお、白峰近くにいる熊は白山熊ちゅうて(とって)、胸にはっきりと白い月の輪が付いとるです。白山熊ちゅうもんは、せいぜいで、昔の目方にすれば25、6貫位です。大きいものは30貫もあつたという話やけど。

熊のお産は寒中ですけど、これは決まっとるです。熊は身持になって、そじてそのお、秋に穴へ入る。岩の穴とか、木のうろとか、土の穴へ入る。

身持ちになって穴へ入る熊は、寒中に子どもを生むちゅうことが、自分も解つとるので、穴の近くに水の出る谷とか、水のでるところにあるです。それはなぜちゅうかいりに、春の子どもに水を飲まさんならんからです。

たいてい熊は雄と雌と必ず2匹生むもんですね。熊ちゅうもんは、そんな3つも4つも絶対に生まんもんです。また1匹生むちゅうことも無いことは無いすですけど、たいてい2つです。その2つは雄と雌です。

寒中の1月から2月の間に生んで、それが4月中葉ごろになるちゅうと、その附近だけへ連れて出て、水を飲まし、日向ぼっこをする。その時分になると、2つの子はちょうど猫の大きいような大きさです。それをひと夏秋まで連れて歩くと、そして秋になって11月12月の、また穴へ入る時分になるちゅうと、5、6貫位の子熊になるです。それをそのお、ミッコモチというとるです。

春の小さい時はニコ、ニコというすね。4月、5月ころのはニコ、ニコというし、それからこんだ、ひと夏連れて歩いて、秋の11月、12月ごろになるちゅうと、ミッコモチと

いうて、そういう名前が付いているです。

そしてまた、2つ子連れて穴へ入るです。そしてこんだ、来年の夏の盛り期になるちゅうと、親熊は雄と雌と2つおるもんじゃから、雌熊を放して、そして雄熊だけを連れて、そしてそのお、また穴へ入るです。そしてそれをフルコ、フルコモチちゅうて、そしてこんだ、その雄熊を自分のおやじにして、そして身持ちになるちゅうと、また雄を放して、自分だけがまた身持ちになって穴へ入る。そしてまた寒中に生むと。そういうような仕掛になっている。

そいでそのお、ニコ、ミッコモチ、フルコ、の3べん、まあ変わる訳です。その離された雌熊と雄熊は夫婦になって、そして子どもを孕む。子どもを孕むと、また雌の方が身持ちになるちゅうと、また穴へ入って寒中に子どもを生んで、また4月、5月になると出てくる。そういうふうに繰返しになっておるような訳です。

そして1つ熊というのが、放された雄なり雌なりの、まだ夫婦になれずにおるのが、1つ熊で。まあ、そういうふうに順序がなっているような訳です。

昔、このお白峰のかみに市の瀬という部落があつたですが、いまでも部落の名前があるのですが、宿屋が1軒しかないですが、昔は7軒ほどあつた部落です。

その市の瀬のちょっとかみに、ノベヨシちゅう広い壁があるです。そこへそのお、ある人が、ちょうど春の雪崩れの出る時分に、



その山へ行って歩いていたところが、雪崩れこ合うて、ちょうどその下に雪の大きなひわれがあったと、そのひわれへ落ち込んでしまった。

どうしても上がることできんし、これはまあ、ここで死んでしまわんならんと思っておったところが、ちょうどそこに熊が一匹おったと。まあ、これは大変なこっちゃ、こういう穴へ入ってしもて、それにまだ熊がおるちゅうが、これは大変なこっちゃ、弱ったもんじゃと思っておったところが、その熊が、ものは言わへんけど、自分も腹が減るし、弱ったもんじゃと思っておったところが、そのお、熊が手を差出して、その手を舐めという意味やね、その人も昔から熊ちゅうもんは、そのお、冬眠する時に、穴の中へ入って春まで手を舐めておるちゅうと、熊は腹が減らんちゅうことを聞いておったもんで、自分も、どうせこうなりや、まあ、はや死ぬが、破れかぶれや、熊が手を差出したもんじゃから、その手を舐めておった。

そしたところが、きみように腹も減らんし、水も飲みとらないし、そして時々熊が手を差出し、それを舐めておった。

そしたところが、雪もだんだん、だんだん消えて、そのほら穴から出られるようになったと。そこから出てきたところが、家の衆が、大変なこっちゃ、お前どこにあったんや、どっか山へ行って雪崩に合うて、もう死んでしもたんや、だいぶ人が出て尋ねたけどもう分らんし、どっかひどい雪崩れに合うて川へでも流れて死んでしもたんやと、大変嘆いておったんや。どうしておったんや。

いや、実はそのお、ノベヨシの壁で雪崩れに合うて、雪のひわれへ落ちていったんや。そして、そこに熊がおって、手を差出したもんじゃから、どうせやぶれかぶれや、どうせ死んだと思おて、そのお、熊の手を舐めると、熊は冬じゅう生きとると聞いたもんじゃから、まあ、舐めた。そうして、舐めたところ

が、ものを食いたいこともないし、水も飲みたいこともないし、そうしたら熊は時々手を差出して舐めさせた。そうして、それを舐めておった。そうしたら助かった。そうしたら雪が解けたから出てきたがや。

それはまたあ大変なこっちゃ。それやあ、熊は熊に違いないけど、それやあ、まあ、なんかや、おまえ、神様かなんかや、白山様のおかげやろ。それは熊ではあるまい、まあ、熊に化けておったけど白山様のなんじゃかも知れん、いうて、まあみんなが喜んで、そして、そのお、おったがや。

そしたら、そのお、そのいう気持の男やったか知らぬけど、そのお、あこに熊がおったがやと。獲りに行ってこうまいか。と誘っておったがやと。そしたら、昔のこっちゃから、みんな、まあ、そういう義理も人情のない、まあ、時代やったんでしょ。そして、そのお、ノベヨシの壁へ熊を獲りに行ったんやと。

鉄砲打ちやとか、大勢の勢子が行った。そして自分は向いの川原に行って、眺めておって、熊があつちへ行ったら、こちへ行ったら、自分が、そのお、柳谷の河原ちゅう大きい河原があるが、そこで見ておった。

ちょうど、そこへ、その熊が出てきた。そして、そのお、鉄砲打ちは山の上の方に、まあ、3人も4人も待ち構えておった。そして、やあ、上の方へ行ったら、下の方へ行ったら、と教えておった。ところが、熊はひっくり返ってきて、下へおりてきて、自分が助けたその人を、二つに引き裂いて、そうして、行ってしもた。

それを、あとから聞いて見るちゅうと、白山様が身変りになって、助けてくれたんやと。それを恩も知らずに、そういうばかなことを言ふたから、その人が引き裂かれて死んだんやと。そうらいきっちり。

〈白峰村〉

雑感

白山は古来「越のしらやま」といわれてきたが、信仰の山として崇められてきた。

そして昨今の開発ぶりの中には、大自然の景観を損なうこと、多く、自然愛好家から親しまれている。

私は地元民の人として、学々今少し自然保護と調和のとれた開発ができれば、いいわ、と考えている。

こうしたことを申し上げると、その節の人から、お言葉はただくが、おしれね。

しかし、この清く美しい白山を、数々の愛好家の人達だけでなく、人でも多くの人で、愛し親しく、愛する、う、た、め、の、推、進、力、が、あ、る、わ、い。



白山夕景



## たより

○ 今書いている原稿が活字になるころには、青空の広がる明るい夏になっているだろうけど、今はまだ「つゆ」の始まりである。今年は里の雪が少なくほっとしたのだけど、山頂部は逆に多く、今でも4m程積もっているそうだ。

○ センターの展示室が改装されました。

第2巻4号でお知らせしたように、サル、クマ、カモシカの骨格標本が展示されました。他に化石標本が数種、温泉の石灰華、高山植物の模型、白山の代表的な樹木の丸太3種など、新しい展示品が増えました。また、各コーナーの移動や新設を行い、見やすくしたつもりです。まだ解説などが十分ではないのですが、秋には整備されて皆様にお目もじできるはずです。

○ センターの前に「つり橋」ができます。これは、センターの対岸に売店と休憩所を作って、下流にできた駐車場からの遊歩道とセンターを結ぶためのものです。今工事中ですので、夏にはユラリとゆれるつり橋を渡ることができるでしょう。

また、センター前の駐車場は緑の広場として、白山にある木や草を植えて、植物園を兼ねた皆様のいこいの場とするつもりです。

## 目次

熊の褥(しとね) .....	松尾 秀邦	3
白山の民話(1)泰澄大師と大蛇 <sup>オロチ</sup> .....	石野 春夫	5
白山国立園案内図 .....	イラスト 西塔 紀夫	6
〈白山麓白峰〉聞き書き(2)白山熊 .....	話者 加藤 勇京	8
	筆者 識田日出夫	
自然公園指導員紹介—永井竹男さん .....		11
たより .....		12

---

はくさん 第3巻 第1号

発行日 1975年6月20日  
発行所 石川県白山自然保護センター  
石川県吉野谷村中宮  
印刷所 株式会社 橋本 確文堂

---